



028

After Century

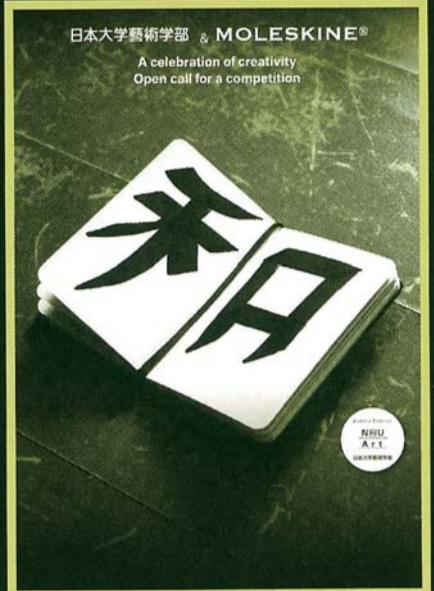
Art Campus

Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design

日藝モレスキンコンペ

日本大学藝術学部 & MOLESKINE
A celebration of creativity

受賞者決定



日 本大学藝術学部とノートブックメーカー「モレスキン」(日本代理店ワーキングユニット・ジャパン社)が共同で Moleskine 創作ノートブックを募集するコンペを行いました。

このコンペは日頃創作活動にいそしむ藝術学部の学生による創作ノートを募集し、その独創的なノートを展示することにより、広く一般にむけて創作的魅力を、ひいては日藝の魅力をアピールすることを目的とし開催されました。

応募総数は40点(審査対象外の大学院生含む)。藝術学部長、各学科の主任の投票とモレスキン代表の厳正な審査の結果、10名が受賞しました。

最優秀賞受賞者の西ノ宮翼君(美術学科4年生)には賞品が贈られ、副賞として今年度卒業記念品のデザイン権利が与えられました。

入賞者の作品は東京都千代田区で開催の「TOKYO GRAPHIC PASSPORT」(2012年10月21日~29日)にて一般展示されました。

その後、藝術学部江古田校舎「A&Dギャラリー」(11月2日~4日)でも藝術祭に併せて展示され、多くの方にご覧いただくことができました。

来場者からは「学生クリエイターの発想の源を垣間見ることができる」「藝術学部の学生のクオリティの高さを実感できた」などのご意見をいただきました。

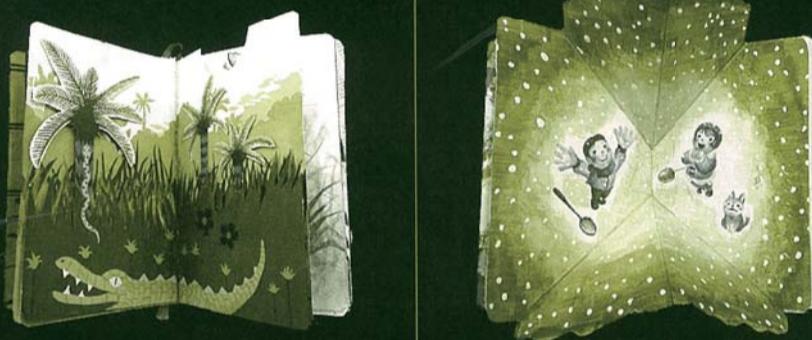
今後は全国の販売店に於いても入賞者の作品が順次展示される予定です。

デザイン学科准教授 佐藤 徹

創作テーマに選ばれた「和」という文字には、様々な意味が込められています。日本大学藝術学部のキャッチフレーズ「8つのアート1つのハート」とも共通点を持ち、調和やつながり、日本、平和、友だちの和、創造の和……

今回のコンペでは藝術学部4年生を対象にモレスキン応募用ノートを配布、ひとりひとり自分自身の「和」を自由に表現しました。

最優秀賞、西ノ宮君の作品



日藝
×
モレスキン
コンペ受賞者

最優秀賞

美術学科 西ノ宮 翼

優秀賞

写真学科 鶴澤弘樹

デザイン学科 亀津勇介

デザイン学科 生沼祐亮

奨励賞

美術学科 大久保つぐみ

美術学科 梅津麻子

デザイン学科 島崎みのり

デザイン学科 若旅彩香

デザイン学科 菊地由莉

デザイン学科 片桐祥太

特別賞(学部長賞)

美術学科 西ノ宮 翼

モレスキン賞

美術学科 西ノ宮 翼

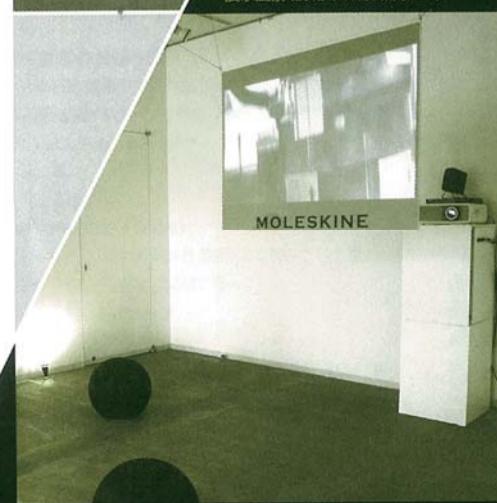
(受賞者以上)



▲ 藝術学部A&Dギャラリーでの展示風景(2012年11月藝術祭にて)



▲ 最優秀賞 西ノ宮翼君のデザインした平成24年度卒業記念品 Moleskine Ruled Notebook Pocket とペーパーがセットされた「Writing Set」。ケースの表紙には8学科のシンボルでデザインされた日藝のNが型押しされ、ノートの帯と扉にも日藝オリジナルデザインが入っている



2012年11月30日 授賞式にて、受賞者のみなさま(前列、左から2番目が最優秀賞の西ノ宮君)

答えはない。けれど、追い続ける。

答えなんて、どこにもない。
だけど、追い続けていれば
自分がけの答えに近づけるかもしれない。
一生懸命に。前を向いて。
答えがないからこそ、彼らは歩き続ける。

放送学科 3年

高本 慧さん

■日藝進学を決定づけた、先輩たちの動画

日藝には日本で唯一のバラエティー番組サークルがある。その名も「ロマンス少年」。2年の時にサークルの代表を務めたのが高本 慧である。

福岡生まれの大坂育ち。小学校の時から大阪で暮らした高本は、大阪のバラエティー番組が好きだった。特に素人を起用した大阪特有のアグレッシブな笑いが好きで、そうした番組をよく観ていたという。そんな高本が日藝に入りたいと思ったのは、高校1年の時。彼の父親がその昔、受験したこともあり、日藝は彼にとって身近な存在だったのである。

一方で高本は小・中・高校とラグビーに熱中し、選抜に選ばれたこともあるスポーツマンでもあった。ラグビーで有名な大学に推薦で行くこともできたが、彼はその道を蹴って日藝進学を選んだ。どちらの道を選ぶか…。その答えを決定づけたのは、高校3年の時、YouTubeで観た『チキンテレビ』『ぶっつけ本番』という動画だった。この動画は「ロマンス少年」に所属する日藝生が制作したバラエティー番組。「学生でもこんなにクオリティの高い作品が創れるのかと正直、驚きました。そして、自分もこういうバラエティー番組を創ってみたい」と思い、日藝に進むことを決めました。

■「授業」こそ、すべての原点

「高校時代は放送部でもなかったし、カメラを回したことなどなかった」という高本は、日藝入学後は何よりも授業を重視した。そのためにどうしたか。彼はテレビ制作を学ぶすべての授業で、評価の最高得点である「S」を取ることを自分自身に課したのである。「プライドをかけて授業に臨みましたね。基本を身につけなければ、応用もできない。授業さえきちんとやっておけば大丈夫という確信がありました」。

番組制作の授業では、アイデアを持ち寄り、学生たちが企画会議を行ってどの作品を創るかを決定する。そして企画が通った学生が、ディレクターとして番組制作を進めることとなる。高本がこれまでに企画・ディレクションを担当した作品は、『笑いの弁護人』、『図書委員の怠惰な放課後』など。『笑いの弁護人』は、世間で“おもしろくない”と言われる人物が被告人になり、果たして本当におもしろくないかを裁判で立証していくという作品。当初、学生たちの間から「笑いを解説するなんて、おもしろいはずがない」という疑問の声が持ち上がりっていた。しかし作品が完成した時、あまりのおもしろさに「すまなかった」と言ってくれた仲間

がいた。

答えのない笑いの世界。自分なりの答えに少しでも近づくためにノートを持ち歩き、授業で学んだこと、ふと浮かんだアイデアなどを書きとめ、常に笑いについて考えてきた高本は、その言葉を聞いて思った。自分が築こうとしている笑いの世界は、決して間違いないではないと…。



2年の授業で高本が企画・ディレクションを務めた『笑いの弁護人』の制作スタッフと最新の機器や本格的なスタジオがあるのも、日藝に入った理由の一つである

■「笑い」への情熱は、誰にも負けない

「ロマンス少年」としての活動では、大学の放送研究会を対象とした企画コンペで優勝し、動画共有サービスを展開するユーストリームで半年ほど生番組を配信。また、同じくユーストリームでロマンス少年の上映会を開催するなど、学外に向けて笑いを発信した。さらに大学に通いながら、PhotoshopやCGの技術を学ぶために半年間、専門学校にも通った。「機械に弱いので、CGはどういうことができるかを知りたかったんです。これからのテレビはCGが不可欠。ある程度の技術を身につけていれば、演出の幅も広がると思いました」。3年の秋の芸術祭に出展した「えがもつ」という作品では、Photoshopを使って番組ロゴを制作したそうである。

授業、サークル活動、専門学校…。様々なかたちで「笑い」を学んできた高本は、いくつもの作品制作を通して自分の笑いを探求してきた。「仲間からは“むずかしい笑い”だとよく言われます。当初は、深夜に放映されるような若者にウケる番組を創りたいと思っていました。でも最近、幅広い世代に支持される作品を創りたいと思うようになりました。自分の番組を見て、若い人にもお年寄りにも、テレビっていいなと思ってもらえるようなものを創り続けていきたいですね」。

高本は自身を「根がまじめ」と分析する。だからこそ、誰よりも真剣に「笑い」を取り組んできたのだろう。できればYouTubeかロマンス少年の公式サイトで彼の作品を観てほしい。あるいは秋に行われる芸祭で、彼の作品に触れてほしい。高本がいかに真剣に、情熱をもって「笑い」と向き合ってきたかがわかるだろう。



高本がPhotoshopで制作した「えがもつ」という番組のロゴ。苦手だったPCを学ぶことで、また一つ世界が広がった

● 誰よりも。真剣に。常にベストを尽くしてきた。

● 自分だけの『音の世界』を見つけてたい。

■音楽がもたらした、希望の光

小学校2年から中学2年まで習っていたピアノを久しぶりに弾いたのは、通信制高校1年の冬。楽しくて、クラシックやジャズを一日中弾いていたという。実は根本修幣には、つらかった時期があった。小学校2年の時に地域のサッカーチームに入り、毎日練習し、全国大会に出場したこともある。中学に入り、怪我をしてから思うようなプレーができず、中学2年の時にチームを退部。学校のサッカー部に入ったが、それでも思うようにいかず、不登校になった。入学した県立高校も1年で辞め、通信制の高校に入り直した。

そんな経験を経て、久しぶりに弾いたピアノが、おそらく彼の心に手を差し伸べてくれたのだろう。高3の時にはテレビや映画となった『のだめカンタービレ』の挿入歌だったマーラーの音楽に感銘し、何もかも—生きていることさえ忘れるほどに聴き入った。それから間もなく、再びピアノを習い始めた。「この時初めて、心からピアノが弾きたいと思いました」。音楽の道に進みたいと思ったのもこの頃。サッカーでの挫折、不登校…つらい経験を乗り越えて、音楽のすばらしさを改めて知り、暗闇から脱出した彼の心には希望の光が差し込んでいた。

■定期演奏会で自作の曲を披露



根本が作曲した『泡影(ほうえい)』は、昨年の定期演奏会で発表され、観客から大きな喝采を浴びた。演奏してくれた学生たちとの記念撮影。根本にとって忘れられない日となった

AO入試で日藝に入学した根本は、本格的に作曲を学ぶという経験を通して、どんどん音楽にのめり込んでいった。入学してから授業内で作った曲は4曲。その中の一曲『泡影(ほうえい)』は、昨年の10月に行われた定期演奏会の演奏曲に選ばれるという快挙を果たし、ピアノと弦管打楽器コースの学生がピアノ、クラリネット、バストロンボーンで演奏した。「音の響きや複雑なリズムなど、至る所にアイデアを散りばめた

ので、自分としては内容の濃い曲ができたと思っています。実際に楽器で演奏すると想像以上に現実的な音だったり、逆に想像以上に感動的な響きだったり、音符だけではわからない新しい発見がありました。先生には『探せば言うことはたくさんあるが、作曲の経験が少ない中でこれだけの完成度の作品を創ったのは大きな成長だね』と言っていただきました。作曲の方法は人それぞれに異なるが、根本はまず一つの物語を想像し、言葉、文字、文章が持つ響きからインスピレーションを得て、感情を剥き出しにする。たとえば「雷が落ちて」などの映像をイメージし、その視覚的な衝撃から音楽を浮かべる。その後、ピアノに向かい、イメージに近い音をひたすら探す。気の遠くなるような作業である。時にはイマジネーションが活発になり、音が頭の中で鳴り続けて眠れないこともあるという。「神奈川県の藤沢に住んでいますが、片道2時間の通学も苦にならない。電車の中で曲のことを考えているので、むしろ良かったと思っています」。

■イメージを具現化するために

根本が好んで聞くのは、言葉にすると“かなわない希望”“重量感のある”“儚い”“逆説的”な曲調のもの。マーラーが亡くなる間際に創った交響曲第九番・十番も好きで、曲創りに行き詰まると聴き、気持ちを奮い立たせるという。「まだ本当に自分が創りたい音楽は見つかっていないませんが、いつか自分だけの音の世界を見つけたいですね。今、僕が創る曲は多くの音が鳴っていて、急に一つの音に集中したり、暗い音とキラキラした音を対照的に使ったり、様々な音や技法を何でも入れるものが多いですね。いろいろな技法や音の可能性を試してみたいという気持ちが強いので、一つの曲にあらゆる要素を入れたくなるんです」。作曲とは、自分のイメージを音に託す作業である。あらゆる作曲の技法や音の持つ可能性を知らなければ、イメージを具現化するのは困難だ。彼はその一曲にすべての要素を入れ込み、失敗や成功を繰り返しながら、自分の音を模索している。

「最近、自分のイメージを音に変換することが以前よりしやすくなりました。好きな音が徐々に見えてきた気がします」と根本は言う。次の曲の構想はすでにできあがっている。「今までにはチャレンジすることに重点を置いてきましたが、今度は初心に戻って、枠にはまった曲を創りたいと思っています」。

自分がマーラーの曲を聴いて人生に生きる光を見いだしたように、自分も人に感銘を与える曲を創りたい——そんな想いを胸に、根本はこれからもずっと音楽と共に生きていゆく。

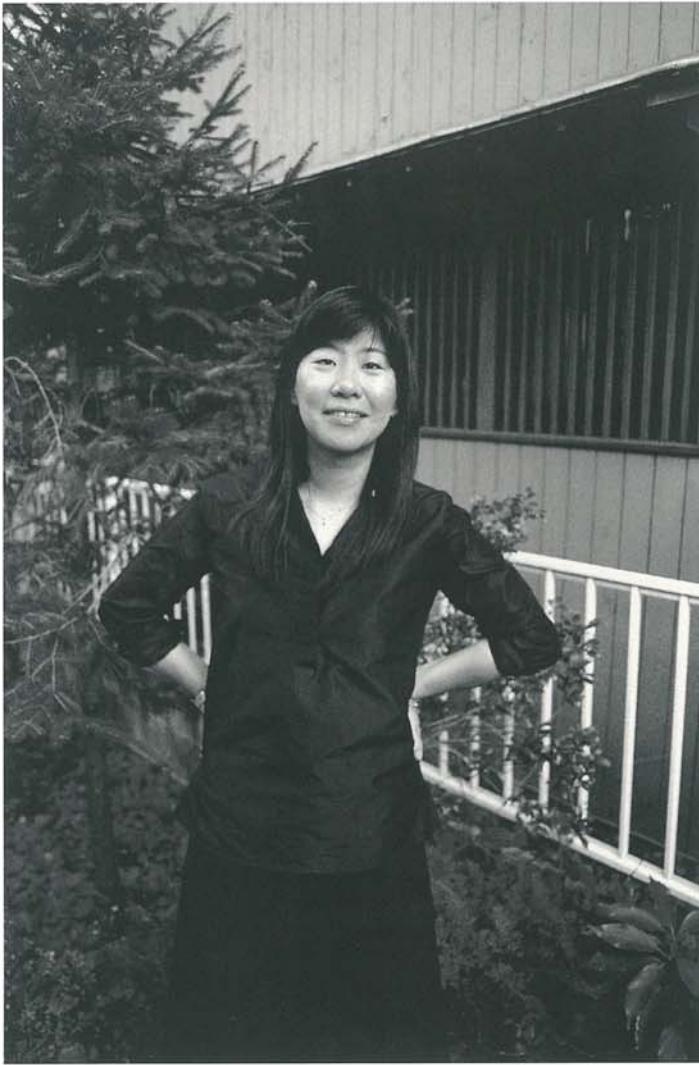


五線譜に音符を書き連ねていくことで生まれる、新しい音楽の世界。一枚一枚の楽譜に、根本の想いが宿っている

よしもとばなな



第7回 日藝賞は、 よしもとばなな氏と森田公一氏に



photograph: Fumiya Sawa

【略歴】

1964年、東京生まれ。
1987年3月、日本大学芸術学部卒業。
同年、小説「キッチン」で第6回海燕新人文学賞を受賞しデビュー。
1988年『キッチン』で第16回泉鏡花文学賞を受賞。
日藝卒業制作の「ムーンライト・シャドウ」は卒業時に日本大学芸術学部長賞も受賞している。
88年『キッチン』『うたかた／サンクチュアリ』で第39回芸術選奨文部大臣新人賞、89年『TUGUMI』で第2回山本周五郎賞とデビュー直後から多くの賞を受賞。
イタリアなど海外での評価も高く、海外の文学賞も多数受賞、著作は30か国以上で翻訳出版されている。他の著書に『ジュージュー』、『スウィート・ヒアフター』など多数。
近著は『さきちゃんたちの夜』(新潮社・刊)

【代表作品】

◎小説

- キッチン | 1988年
ムーンライト・シャドウ | 1988年
うたかた／サンクチュアリ | 1988年
TUGUMI | 1989年
アムリタ | 1994年
不倫と南米 | 2000年
どんぐり姉妹 | 2010年
ジュージュー | 2011年
スウィート・ヒアフター | 2011年

◎エッセイ

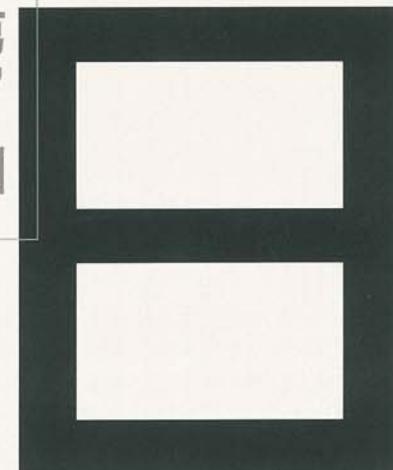
- 人生の旅をゆく 2 | 2012年

Banana Yoshimoto

日本大学芸術学部文芸学科(昭和61年度卒業)
小説家

N ★ I ★ C ★ H
AWARD FOR

第7回



幸

日藝賞とは、芸術学部に在籍していた人社会に貢献し、芸術を志す学生の夢の第7回日藝賞は、2012年11月6日から3友会役員等の投票により選出された候補などを検討の結果、よしもとばなな氏(昭和6(昭和34年度音楽学科入学・作曲家)に決定授賞式は2013年4月8日の入学歓迎式で賞状とバカラ社製クリスタル記念トロフィ

【受賞歴】

- 第6回 海燕新人文学賞 (1987年『キッチン』)
第16回 泉鏡花文学賞 (1988年『キッチン』)
第39回 芸術選奨文部大臣新人賞 (1988年『キッチン』『うたかた／サンクチュアリ』)
第2回 山本周五郎賞 (1989年『TUGUMI』)
第5回 紫式部文学賞 (1995年『アムリタ』)
第10回 Bunkamura ドウマゴ文学賞 (2000年『不倫と南米』)
その他にイタリア共和国にて
スカンノ賞 (1993年)
フェンディッシュメ文学賞〈Under35〉 (1996年)
マスケラダルジェント賞 (1999年)
カプリ賞 (2011年)

第6回
船越英一郎
(ロボットデザイナー)

第6回

松井龍哉

S

EISHUNの君たちへ

人の話を聞くことの意味

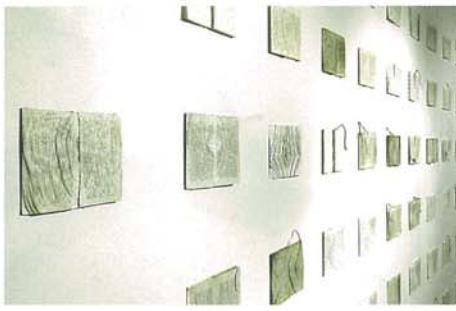
—経験の原因と結果の結び方—

飯田竜太 ○ 美術学科 平成16年度卒



photograph: SHITAMICHI Motoyuki

「人」の話を聞く」という行為自体がそもそも危険な状況であると常に感じている状態ではなかなか話の意図や方向性、むしろ教育的な部分になった場合にはほとんどスルーされます。この抑制された状態はむしろこれから時代の大変なスキルとして自覚してほしいと思います。わからないものを理解しようとするとき、自己の危険を察する能力が弱まり、情報が一気に自分に流入します。しかしそれら全てを鵜呑みに理解する程、その情報を与えてくれた源を自分が理解しているのかという疑問と、その情報の精度が高いのか低いのかを判断するための知識があるのかをしっかり考え、捉えておく必要があると思います。では何をよりどころにして様々な事象に対し、判断しなくてはいけないのか。絵を描く、彫刻を作るというスキルのほとんどが、現在の社会流通システムでは重要視されていません。これらのスキルで経済的に安定を目指すことは不可能です。大学には夢のような生活を実際に行った成功者もあり、その方にはそれ以外の人や分野を離れた人の動向や心境は当事者ではないので決して理解されません。大学の重要な部分は、そのような成功者に多く出会えることです。成功者との差を自分で埋めていく作業が自分の道を切り開くことになると思います。夢のように広がる話を常に俯瞰的にとらえ、自分がその当事者ならどんな選択をするのか、仮想選択を繰り返す。そこで悲観的にも肯定的に自分の道が定ります。もちろん自分を正当化するための自信やおごりも必要で、自分の行動でそれらが宿ることも忘れてはいけません。自信やおごりは、達成という問題解決の状況に出会うことでしか得られないと思います。常に自分に問題を課しておく必要があると思います。常に求め見つけ出し、自分を選択の場におき、幾度もその壁を乗り越えていくこと。そんなことしか自信やおごりを持ち、成長することはできないと思います。選択の場には、必ず原因と結果があります。失敗や成功はどちらでもよく、その時どのようにその原因と結果を自分で見つけ出し結びつけるかが重要だと思います。23歳の時、本当にいろいろなことをしました。しかし全てが無駄ではありません。一つだけ悔やむことは、「人の話を聞く」という行為を、しっかり考えていなかったことです。選択の状況下において、その意味を知り体験する人と、そうでない人では原因と結果の結び方が違う。結び方が違うと自分の選択の場に優劣を感じるようになります。そこが大きく悔やまれます。生きるための知恵として、社交や礼儀も大切ですが、「人の話を聞く」ということを自分でどう考えておくかが重要なのだと思います。



「学び」途中の者から一言

桐山知也 ○ 演劇学科 助教



「S EISHUNの君たちへ」の原稿。さて、何を書いたものか。

「SEISHUN」とは「青春」のことだろうが、その言葉にアリティーを感じたことがない。それを「学生時代」と捉えても問題ないだろう。では、ぼくは「学生時代」に何をしてきたのか。そもそも、ぼくはなぜ芝居を学ぼうとしたのか。さて、「君たち」はどうですか？

もし、「君たち」が直感的に、写真を、映画を、音楽を…なんでもいい、何かを学ぼうと思ったのなら、その直感を信じたほうがいい。経験から言うと、その直感こそが「学ぶ」上でとても重要（ぼくはそれだけでここまでやってきたようなものです）。「学び」という行為は、未知の、なぜだかわからないけど、でもこれを学ばなくてはならない（やらなければならない）と、直感的に強く思うことそのもののような気がしてならない。逆に、これをやるとこんな効果がある、例えば、この通信講座をやると資格が取れて就職に有利とかいうのは学びではなくて、ただの（「世の中すべて金」みたいな幼児的発想につながる）算断的な行動でしかない。

そして、その直感を成就させるには、やっぱり、いいメンター（師）を見つけるべき（ルーク・スカイウォーカーが、オビ＝ワン・ケノービやヨーダに会ったように）。でも、いいメンターと出会うのはとても難しい。なぜなら、いいメンターというのは、これも直感的に感じるものであって（出会うものであって）、あれこれ下調べして探すことは出来ないから。メンターは「君たち」に、未知の、なぜだかわからないけど、でもこれを学ばなくてはならない（やらなければならない）ことを教えてくれる人だから、なぜこの人が自分にとっていいメンターなのか調べることができてしまったら、それ（学ぼうとしていること）はその時点で既に未知のものでなくなってしまう。

かく言うぼくも、まだ直に出会ったことのない書きものを読んだことしかない或る人を私淑し続けたり、まだまだ「学び」の途中です。そのなかで、ここ数年よく思うのは、あたまで理解するより身体で理解するということのほうが大事だということ。身体的な経験（体験）を通じて理解しないと、学んだことはやっぱり自分のものにならない。個人的には、年をとったせいか、身体的な感度が落ちているらしく、受け止めるべきシグナルをキャッチ出来ていないように思う。「君たち」はまだ若く、いろんなことをどんどん受けとめることができるだろうから、羨ましい限りです。その若い身体でどんどん学んでください。きっとまだ分からぬだろうけど、年をとるというのはほんと大変なことなんだよ。

夢を実現するために

加藤弘一 ○ 体育 教授



い ま、何か打ち込めるものや、こんなふうに生きてみたいというものを持っていますか？

自分が本当に求めているものは何か、どのような生活を目指しているのか、そのためにはどのような方法と道筋があるのか、どの段階で何をすれば良いのかなどを、自分で客観的に状況判断をして、その結果、自分自身が「いま、ここで何をしたらいのか」を考えることが大切だと思います。

「自分はこうなりたい、こうしたい」という目標が明確であればあるほど、そこにいたる道筋もおのずと明らかとなり、現在の自分自身が映し出されてくると思います。逆に、目標がはっきりしていなければ現在の自分がこれまで良いのかどうかも分からぬまままで、時間だけがどんどん過ぎてしまいます。「自分が本当に求めているものは何か？」を自分でつかむことがとても重要なことだと思います。

夢を持つことは素敵なことです。そして、「必ず達成する！」という強い信念と情熱があれば、夢は必ずや実現できるでしょう。大きな目標を達成するためには、まず自分の足元を見つめることができます。今日一日をどのように過ごすかを考えてみてください。一日、一日の積み重ねが夢へのステップです。素敵な夢の実現のために、小さなハードルをいくつもいくつも飛び越えていくようになれば、成功への扉が開けるでしょう。

飯田竜太氏は先日開催された「アートフェア東京2013」において、田中義久氏と結成するアートユニット“Nerhol（ネルホル）”として『ペーコン・プライズ 2013』を受賞。この賞は「アートフェア東京2013」に出演する40歳以下のアーティストの中から、国籍に関係なく先進的で優れたアーティストを1名(組)選出するものです。

親不孝者のひとりごと

東海林孝之 ○ 所沢校舎教務課長



入 院中に突然亡くなった父との最後の会話について、思い出すことがある。

当時、私は23歳。ちょっとした言葉の行き違いから、病室内で口論になり、「また来週来るけどね、おとなしくしていたほうがいいんじゃないの！」というような捨て台詞を吐いて部屋を出た。あれが最後だった。父にとって、来週という時間は来なかった。

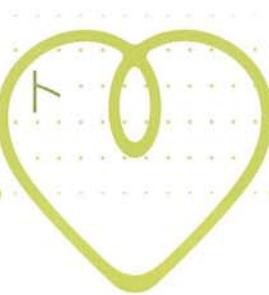
その後10年ぐらいの間、自分の言ったこと、やったこと、今さらどうしようもないことを、思い出しては悔やんでいた。

やがて、長男、次男が生れ、息子たちとの時間が過ぎていくうちに、最後の会話を思い出すことはなくなっていました。しかし、父の年齢に追いつくまでの年数が片手で足りるようになり、生意気な長男の屁理屈に閉口したり、苦笑いしているうちに、親子の機微であろうか、最近になって、再び思い出すようになった。そして、口論の原因が何であったかを考えた。父は思うようにならない体に苛立っていたのか、気持ちを察しない私のことが情けなかったのかと。あれこれ思いを巡らすきっかけは、長男に注意して言い返された「何、キレてん？」という一言であった。私も同じような言葉を父に放っていたのだ。

不思議な気持ちになった。かつての私自身のようで、鏡を見ているような、小っ恥ずかしいような。

振り返ると、私はいたわりの言葉など言えるわけでもなく、気持ちにも鈍かった。子供のまま父と別れたのだ。しかし、あの日、たいして話もせずに帰っていたら、それはそれで悔いは残ったと思う。言葉を交わしたから、こうして思い出すこともあると都合よく考えるようになった。だから、反抗期の長男や甘ったれの次男にも、今までのようによっかいを出して、ああでもないこうでもないと、突っ込んだり突っ込まれたり、気楽にいきたいと思う。

学生の皆さんには、家族、友人、先輩、後輩、先生など多くの人々との会話があると思います。私自身の反省を込めて記しますが、時には言い過ぎたり、相手の言葉に傷ついたりすることもあるかもしれません。人として許されない発言は論外ですが、謝ったり、譲歩したりで誤解が解けることや、言葉は少なくとも、助けられたり、助けたり、行動によって理解が深まることがあると思います。皆さんの今後が、人々とのかかわりのなかで、人間関係の可能性を広げ、濃密で充実した時間となるよう願っています。



幕末明治のタイムカプセル —歴史的写真の再撮影プロジェクト

1839年にパリで公表された最初の写真術ダゲレオタイプは1848年に日本に渡来した。その後、湿板写真術が導入され、幕末明治初期には日本各地で多くの写真が撮影されている。大判の湿板で鮮明に撮影されたこれらの写真は、当時の街や自然の風景を現代にリアルに伝える貴重な記録である。

写真学科の原直久教授、高橋、田中里実専任講師の研究グループは、これら歴史的写真に基づいた再撮影プロジェクトを平成20年から実施している。再撮影により未だ明らかでない当時の写真技術を検証するのが目的である。

プロジェクトでは歴史的写真の撮影場所を同定し精密な再撮影を行っている。当時の写真は大判ガラスネガの密着焼付けのため、再撮影した画像サイズと比較することで当時の撮影レンズの焦点距離が計算できる。このため当時多用された10×12インチ(四切 25.4×30.5cm)判をカバーする11×14インチ(大四切 28×35.6cm)判カメラを特注製作し再撮影を行っている。

湿板写真は写真家が撮影の現場で感光板を自製し、濡れたまま撮影する原始的ともいえる技術である。しかし古い時代に撮影された大判の原板や、焼き付けられた鶏卵紙写真には驚くべき情報量が記録されている。この湿板写真の復元再生も研究の一部であり、再撮影による検証と合わせ、写真師の同定や技術伝承の解明などの可能性も探っている。

また再撮影により、幕末の開国から明治以来の近代化の中で日本人が環境をどのように変えてきたか、それを知ることも興味深い。5月には本研究の成果を発表する写真展示を芸術資料館で開催する。

写真学科教授 高橋 則英

幕末明治のタイムカプセル —歴史的写真の再撮影プロジェクト展

芸術資料館にて
5月7日(火)～5月24日(金)



▲11×14インチ判カメラによる福井山側の高台からの長崎港の撮影、2012年



▲長崎・眼鏡橋での湿板写真の撮影、左の携帯暗室を使用、多数の報道陣が取り巻く、2012年



▲上／「立山からの長崎港と市街」フェリーチェ・ペアト©、幕末期
下／「立山からの長崎港と市街」再撮影プロジェクト、2008年



学生映画祭「新・女性映画祭 “こんなふうに私も生きたい”」

映画学科評議会の3年生が、企画から上映交渉、広報、チケット販売から会場の運営まで手掛ける映画祭を渋谷の「オーディトリウム渋谷」で始めて、2度目になる。23年度は「1968」をテーマにしたが、24年度は「新・女性映画祭」という題名のもと、学生が「こんなふうに私も生きたい」と思う映画を13本選び、12月15日から21日までの1週間にわたって上映した。一番の目玉は「アリス・ギイ傑作選」で、世界初の女性映画監督といわれるアリス・ギイの短編20本をフランスのゴーモン社アーカイブから借用して上映した。また、崔洋一、羽田澄子、原一男、井口奈美の各監督のトークショーも開催。今回は1週間で1100人の集客で、前回の1600人に比べると若干少ないが、映画館からは是非来年も実施してほしいと希望が寄せられている。

映画学科教授 古賀 太

◀『新・女性映画祭』パンフレット表紙

▶崔洋一監督のトークショーの様子



受賞者一覧

去る3月25日に平成24年度卒業式及び学位記授与式が挙行されました。日本大学総長賞・優等賞、芸術学部長賞、芸術学部奨励賞など卒業生、大学院修了生に対する各賞の発表及び表彰がありましたので、学外のコンテストなどで活躍された受賞者と併せてお知らせいたします。

◎日本大学総賞(学業部門)

小池 潤(写真)

◎日本大学優等賞(学業部門)

松永育子、桃井奈名子、朝内拓雄、小池 潤(以上写真)

首藤法子、佐野綾香、牧田佳織、内田沙季(以上映画)

大田黒 舜、平野 愛、山本裕子、内田理絵(以上美術)

谷 亜矢子、山田あづさ、糸井川夏穂、原田彰子(以上音楽)

細井麻奈美、木本あすみ、杉平麻梨絵、奥野拓也(以上文芸)

伴内絵里子、小沼 和、平田美穂子、飯野愛希子(以上演劇)

張 守妍、金井勇樹、大野 敦、安平衣里(以上放送)

浅見有希、鈴木麻紗子、倉地賀也、杉野亜美(以上デザイン)

◎日本大学優秀賞(学術・文化部門)

額賀 澄、中野沙羅(以上文芸)

◎日本大学奨励賞(学術・文化部門)

杉田めぐみ(デザイン2年)、千葉佐記子(映像芸術1年)

◎芸術学部長賞

○学業部門

桑田恵里、小西由紀、山本泰輔、野村和宏、中村高樹(以上写真)

世繼夏南、佐近圭太郎、平野 礼、高橋泰治、岡本千明(以上映画)

當麻彩子、井口結菜、石井悠子、浅香百百子、田邊由貴(以上美術)

大津康平、小山百合恵、日高麻子、石井恵美、木下 晶(以上音楽)

細井麻奈美、額賀 澄、堀井球子、嶋崎 彰、伊藤果南(以上文芸)

大橋佳帆、齋藤優衣、佐藤萌香、山田拓実、余川紘野(以上演劇)

鈴木つかさ、伊藤 剣、川野 悅、山本明広、三宅 愛(以上放送)

渡邊真弓、片桐祥太、山本将史、末永真淑、市川雅輝

(以上デザイン)

○その他の部門

篠田 篤(放送)

◎芸術学部奨励賞

小田佳奈(写真)、高木 愛(映画)、山崎雄士(美術)、

高野峻典(音楽)、嚴 暉美(文芸)、陣矢恵里花(演劇)、

宮手美菜子(放送)、杉野亜美(デザイン)

◎芸術学部金丸重嶺賞

加藤雄也、吉崎千佐子、小柴託夢(以上写真)

◎芸術学部渡辺俊平記念賞

福田果歩(映画)

◎芸術学部呉正恭賞

張 守妍(放送)

◎芸術学部川野希典賞

青山桃子、小林沙羅、福井美砂貴、山口こゆき、

榎本光希(以上演劇)

◎芸術学部若見有弘賞

清水 韶(映画)

◎芸術学部大竹徹賞

佐賀美平(映画)

◎芸術学部八木忠信賞

木村麻友子(映画)

◎芸術学部湯川制賞

金子摩耶(文芸学)、後藤弘毅(映像芸術)、西原久美子(造形芸術)、

原 久美子(音楽芸術)、山方 充(舞台芸術)

◎芸術学部澤本徳美賞

小柳裕範(文芸学)、侯 鵬暉(映像芸術)、酒井みのり(造形芸術)

◎生産工学部賞

菊地 彩、當麻彩子(以上美術)

◎平成26年度「日本大学進学ガイド」

○表紙デザインの部

最優秀賞 中川美沙(デザイン)

優秀賞 藤平奈央子(同3年)

優秀賞 金子桜子(同3年)

学部長賞 下間 碧(同1年)

○メイン写真的部

最優秀賞 大橋絵莉花(写真2年)

優秀賞 川村将貴(同1年)

優秀賞 本藤太郎(同2年)

学務部長賞 中村彩乃(同3年)

◎写真学科卒展2013

○新写真派協会賞 野村和宏(写真)

○写真学科奨励賞 森田 翔、川野太蘭、小野真太郎(以上写真)

○映画学科奨励賞

青山リサ、牧田佳織、天沼佳奈、長瀬万里、星 潤哉、

馬場 愛、山田麻沙子(以上映画)

○映画学科選賞

加治野 葉、渋谷美久、津留徹史、百田いづみ、関谷壮史、

村上拓也、村上 玲(以上映画)

○映画学科特別賞

伊津野朝子、植田倫世、大友奈美、松永太郎邦雄、

原田夏美、押田 崇、初村真樹(以上映画)、

卯木亜沙美、鈴木佐衣子、佐久間安里(以上映画3年)

○アートライティング賞

鎌田孝之(映画)、名古屋純子(以上映画3年)

○映画学科コドック賞

斎藤弥里、杉江亮輔、長谷川真鷹、大間奈緒、角屋拓海、

小野寺志織、加藤エン(以上映画)、福尾直己、古賀達朗、

廣瀬知美、山岸俊哉、土谷瞳子、高村有沙、篠田有希(以上映画3年)

○江戸クリエート賞

田中亮祐、高木清香、田中國男(以上映画3年)

○第8回公共広告CM学生賞

○最優秀アイディア賞

『マナー専用車両』:増田貴明、大平奈央(以上デザイン)、

石田智美(文芸)、牛山直美(演劇)、太田絢子、安本 伶(以上写真)、

小形 翔、高山由菜(以上放送)、清水朗樹(映画)

○優秀賞

『ヤバい語』:島崎みのり、増田貴明、外山里香、長井 創、

大平奈央、菊田みなみ、益子恵理(以上デザイン)

『忘れ物』:石井美佳、一條薫子、今 なつき、佐藤廣樹、

塙野芽衣、田谷凜子、比田井彩歌、柳沼香陽子、輪島大也(以上デザイン)

○STEAMCREAM 5周年デザインコンペ

○最優秀賞 藤平奈央子(デザイン3年)

○第4回JPCAデザインアワード

○準グランプリ 伊藤安奈(デザイン3年)

○優秀賞 藤平奈央子、輪島大也、山本佑美(以上デザイン3年)

○エステーデザインアワード2012

○入選 高橋夏美(デザイン3年)

○第16回きものデザインコンクール

○入選 平野志奈(デザイン2年)

○第7回金の卵オールスター・デザインショーケース

写真学科**◎日本大学芸術学部写真学科2013卒展**

毎年恒例の卒業展が本年は3会場で開催されました。
●全体展(参加者全員の作品展示:各1点)
会場:江古田校舎芸術資料館 2月15日~3月2日
出展作品の中から下記の優秀作品が選ばれました。

○新写真派協会賞

野村和宏「星ふる夜の背くらべ」

○写真学科奨励賞

森田翔

「NOOUR」

川野太蘭

「country of PUJA」

小野真太郎

「SOURCE」

**●全体展(参加者全員の作品展示:各1点)**

会場:新宿ニコンサロン(ニコンサロンbis新宿)

3月9日~11日

●選抜展

卒業制作の中から8名を選抜、複数作品による展示が行われました。
出展者:桑田恵里、小西由紀、岡田純哉、

趙スラ、加藤雄也、吉崎千佐子、野村和宏、森岡舞子
会場:ポートレートギャラリー(四谷) 3月7日~13日

●平成24年度大学院映像芸術専攻修了制作展

江古田校舎芸術資料館 4月15日~26日

●平成24年度卒業・修了制作優秀作品展

平成24年度卒業・修了制作の中から、下記優秀作品を江古田校舎東棟写真ギャラリーで5月から順次展示します。

○芸術学部長賞

桑田恵里「共生・侵蝕」/小西由紀「Revelation Of Life」
山本泰輔「確かにそこに」/野村和宏「星ふる大地」
中村高樹「戦争遺跡と緑の光景」

○芸術学部奨励賞

小田佳奈「MY 23.」

○金丸重嶺賞

小柴栄夢「人間への警鐘」/加藤雄也「カタヨリの箱」
吉崎千佐子「角を曲がったら」

○澤本徳美賞

侯鶴暉「都市に潜む夢」

○幕末明治のタイムカプセル

—歴史的写真の再撮影プロジェクト展

江古田校舎芸術資料館 5月7日~24日

●オリジナルプリント展黑白ファインプリントの名作2

写真学科のオリジナルプリントコレクションの中から、優れた黑白の写真作品を展示します。

江古田校舎芸術資料館 5月28日~6月21日

映画学科**●上倉泉教授、中島裕介助手が録音スタッフとして参加した「京太の放課後」が「ゆうぱり国際ファンタスティック映画祭2013」コンペティション部門で優秀実写賞を受賞**

大川五月監督(映画学科卒業生)

(インターナショナル・ショートフィルム・ショウケース部門)

●齊藤裕人教授が委員をつとめる練馬区の「アニメ産業と教育の連携事業」が経済産業省主催「第3回キャラクターアワード」の大賞に決定**●作品上映会「Focus in 2013」6月開催予定**

平成24年度に制作された「卒業制作」及び「映画演出III」「映画技術III」の全作品を上映予定です。

●学生作品がJ:COMチャンネルの「日藝アワー」にて放映中

映画学科の授業内で制作された学生作品が「日藝アワー」にて放映されています。放映時間等詳細はJ:COMホームページ「MY J:COM」にてご確認ください。

●作品上映会のご報告

○映像コース学生有志による「卒業計画」などの作品上映会が3月16日、17日の両日、江古田校舎東棟EB2教室にて開催されました。

○監督・撮影・録音、演技コース学生有志による「卒業制作」上映会が3月14日から17日まで江古田校舎大ホールにて開催されました。

美術学科**●第16回岡本太郎現代芸術賞 特別賞受賞**

美術学科 内山翔二郎助手 作品名「Never Die」

受賞作品は第16回岡本太郎現代芸術賞展で展示(2月9日~4月7日)

●各種展覧会のお知らせ

○第64回十日町雪祭り 2月15日~17日

雪の芸術作品部門で十日町平成ライオンズクラブ賞を受賞 「フェニックス～それは十日町～」

○「鉄・彫・写」

6月7日~8月4日

星と森の詩美術館(十日町市)

鞍掛鉄一教授 田中里実専任講師(写真学科)が出品

ON+N展 練馬美術館 6月27日~7月7日

○瀬戸内国際芸術祭2013 夏

7月20日~9月1日

鞍掛鉄一教授+日本大学芸術学部彫刻コース有志が参加決定

○引込線2013

8月31日~9月23日 10:00~18:00

旧所沢市立第二給食センター

富井大裕助教が出品

音楽学科**◎演奏会のお知らせ**

○平成24年度卒業論文要旨発表会

3月21日 14:00~ 江古田校舎音楽小ホール

音楽教育:木下晶、村越優香

情報音楽:田中敦士、塩野洋一朗、安居顯太朗、若林夏美、高野峻典

○平成24年度卒業演奏会

平成25年3月21日 18:00~

練馬文化センター 小ホール

ピアノ独奏:日高麻子、谷亜矢子、山田あづさ、福井碧子、糸井川夏穂

弦管打楽独奏:深澤美香、佐々木聖子、石井恵美、田上みづほ、中島若菜

声楽独奏:小山百合恵、大津康平、根本恵子、田村奈々恵

○日本ピアノ調律師協会 第14回新人演奏会

4月21日 17:00~ 東京文化会館小ホール

日高麻子

○第82回読売新人演奏会

東京文化会館小ホール 5月5日・6日 11:00~

トランペット独奏:田上みづほ

Pf:未定

ピアノ独奏:日高麻子

バリトン独唱:大津康平

伴奏:谷亜矢子

○ヤマハ管楽器新人演奏会

開演時間未定 ヤマハホール

5月23日 クラリネット独奏:袖山和

5月24日 フルート独奏:鈴木あや

5月25日 トランペット独奏:石井恵美

○ムラマツフルートデビューリサイタル

日時未定 深澤美香

文芸学科**◎山下洪文さんが文芸思潮48号「現代詩賞」優秀賞受賞!**

文芸学科4年、山下洪文さんが「不帰郷」で文芸思潮第48号「現代詩賞」優秀賞を受賞しました。受賞作「不帰郷」は文芸思潮第48号に掲載されています。

◎樋口仁美さんが第二次映画事変3分映画宴の特別賞を受賞!

文芸学科3年樋口仁美さんの監督・脚本作品「開花の舞」が、第二次米子映画事変「第二次映画事変3分映画宴」の特別賞を受賞しました。

◎額賀満さんが第24回舟橋聖一顕彰青年文学賞最優秀賞受賞!

文芸学科4年額賀満さんが、小説「俺とマッ缶の行方」で、第24回舟橋聖一顕彰青年文学賞の最優秀賞を受賞しました。

◎日藝の卒展(2012年度 日本大学芸術学部卒業制作展)・文芸を開催しました

日藝の卒展・文芸を以下のとおり開催し、連日多くの方にご来場いただき好評のうちに終了しました。

日程:2013年3月16日~29日

場所:西棟5階 文芸資料室

内容:平成24年度文芸学科優秀卒業論文・制作集、ならびに平成24年度に提出された卒業論文・卒業制作の展示・閲覧。

◎第十六回文学フリマin大阪に参加します!

文芸学科は、第十六回文学フリマin大阪に参加します。平成24年度発行のゼミ雑誌を中心に展示を行います。

日時:4月14日 11:00~16:00

会場:堺市産業振興センター イベントホール

◎「ゼミ雑誌のための展示会」を開催します

平成24年度に発行されたゼミ雑誌を中心に展示・配布を行います。ご来場、お待ちしております。

日時:5月27日~6月14日

10:00~20:00(最終日は12:00まで)

場所:江古田校舎ギャラリー

※日・祝日閉鎖(6月2日は9:00~16:00まで開館)

演劇学科

新年度のスタートと共に今年も演劇学科の企画や実習発表がはじまります。江古田校舎正面で学内外の皆様をお迎えする大階段が目印の、北棟内ホールにてお待ちしております。今年度も演劇学科のステージをお楽しみください。前期の公演日程は下記の通りです。

◎3・4年生舞台総合実習**○舞台総合実習Ⅲ(A) (演劇)**

6月14日~16日 江古田校舎北棟・中ホール

○舞台総合実習Ⅲ(C) (日舞)

7月6日 江古田校舎北棟・中ホール

○舞台総合実習Ⅳ(D) (洋舞)

8月2日・3日 江古田校舎北棟・小ホール

※現在上演は未定です。最新情報は学科ホームページでご確認下さい。<http://theatre.art.nihon-u.ac.jp/>

放送学科**◎「夢のつづき」作・出演**

脚本実習IIの森治美講師が脚本を執筆した舞台劇『夢のつづき』(演出:安井ひろみ)が、3月19日~24日、笹塚アクトリーにて上演され好評を博しました。

これは、高校時代に演劇部で活動を共にした女性たちが、一人の仲間の葬儀に集まり、その遺作となった未発表の戯曲を一周忌に上演しようと動き出すことから始まる物語。元演劇部の織田薫役には、「役者をやるのはこれが最初で最後」というアナウンス実習IIの近藤サト特任教授が出演しました。

NFO. CALENDAR**028****College Administration Office****【事務局からのお知らせ】****●平成25年度授業日程**

在学生(2年以上)ガイダンス 4月5日(金)6日(土)於:両校舎

平成25年度入学式(全日大) 4月8日(月)於:日本武道館

芸術学部入学歓迎式 4月8日(月)午後 於:江古田校舎

新入生ガイダンス 4月9日(火)10日(水)